

# 粥米の羯鼓舞

今年も見られる！

今年(しんこうさい)は10月11日に本納(おとちばな)の橘樹(たちばな)神社の例祭(よめのみこと)がとり行われます。3年に一度の神幸祭(やまとたけるのみこと)に弟橘比賣命(おしやまのすくね)・日本武尊(みこと)・忍山宿禰(だし)の御霊(みこし)を戴いた三基(みこし)の神輿(みこし)が町内を練り歩き、神輿の間には桃色の花を飾った山車(だし)が入って、祭りを一層盛り上げます。その先導の大役を担うのが羯鼓舞(市指定民俗無形文化財)です。



← 神社で奉納される羯鼓舞

主役は女性  
羯鼓舞の神事は、市内法目の粥米地区の人々が守ってきました。  
雌雄の獅子頭をつけた三人が、羯鼓(太鼓)を腹につけ、両手の撥で打ち鳴らしながら、笛に合わせて飛んだり跳ねたりします。舞をリードするのは、主祭神の弟橘比賣命を表す赤いたてがみの雌獅子です。

## ハ タ ウ ン

第82号

### 生涯学習情報

●連絡先●

生涯学習課  
☎20-1559

## 弟橘比賣命

橘樹神社主祭神ですが、一般的に辞書(古語辞典など)で【弟橘媛】と表記。日本武尊の妃。忍山宿禰の娘で、日本武尊に従い、走水の海(浦賀水道)を渡ろうとしたとき、風波が起これ、海神をなだめるために身を投じたということです。



復活した羯鼓舞  
粥米地区では羯鼓舞を代々長男が受け継いできました。しかし、後継者不足から行われない期間が約十年ありました。それを復活させたのは今井さんを中心とする地元(粥米)の若手です。現在、頭取を務める今井さんは、子ども(粥米)のころから、父の舞う姿を見て、太鼓なども習っていました。そして「いつしか自分も」と思っていたそうです。

復活のきっかけは、あるとき粥米地区に結婚により男性が入ってきたことです。この人数なら舞を復活させられると、年長の人たちを説得して、従来のしきたりをゆるめ、十数年ぶりに練習開始にこぎつけ、さらに、稽古(稽古)の指導もお願いしました。  
今井さんは「羯鼓舞を知る自分が、今残さなければ...」という気持ちだったと、来し方を振り返っています。  
舞の動きが激しいために、若いうちでなければ務まらない。また、被り物が今の人たちにはきつくて頭痛がして、草鞋(わらじ)で足も痛くなる。たいへんなことばかり...。  
しかし、2012年の例祭で舞ったときに、「生きているうちに見られてよかった。」と大好評。



地区それぞれの山車が練り歩く

## 粥米について

地元に残る伝説で、日本武尊が東征のとき、この地方で供された粥(かゆ)が気に入って、「粥米」を地名に賜ったと伝えられています。どんな粥で、その時の炊事は?興味がありますが、記録がありません。  
市立美術館・郷土資料館に展示されている、市内国府関から発掘された、約千七百年前(古墳時代初頭頃)に使われた土器があります。



古代の炊事用土器

昨今の粥は土鍋ですが...昔の炊事の様子を知るよすがとなりそうです。

また、子どもたちに伝統の舞を見せられて、羯鼓舞をやって良かったとの思いを強くしたとのこと。

そうして、もっともっと大勢の人たちに見てもらいたいとの思いを強くしたそうです。

(左頁へ)